

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.170, April 2026

目次

〈新年度のご挨拶〉.....1	拡大研究会報告
〈CAPS企画の報告〉	「ユートピアへの憧憬：クリス・ツェーの詩について」
CAPS主催講演会	文学部 教授 遠藤 不比人.....4
「未来に拓く女性政治リーダーへの道」報告	〈シリーズ 本を読む〉
新潟国際情報大学 国際学部 准教授	ビオリカ・マリアン著、今井むつみ監訳、桜田直美訳
(前CAPS主任研究員) 蔡 珂.....2	『言葉の力「思考・価値観・感情」なぜ新しい言語を持つと
〈招聘外国人研究員との交流報告〉	世界が変わるのか?』(KADOKAWA、2023年)
Travelling in Forms: The Sonnet in Aotearoa / New Zealand	経営学部 教授 藤田 玲子.....5
Dougal McNeill	〈CAPS活動報告〉.....6
Victoria University of Wellington, New Zealand3	

新年度のご挨拶

アジア太平洋研究センター (CAPS) 所長 永野 護 (経済学部 教授)

2026年度のアジア太平洋研究センターは、4月・7月・11月・12月に計5回の講演会を開催します。当センターが対面・オンラインでの講演会を実施する目的は、成蹊大学の学術的知見を発信することで、社会に広く本学教育の水準を理解いただくことにあります。そして当センターは、1981年の設立から今日まで、その知見を育むための研究プロジェクトの支援も継続的に実施してきました。これまで数々の研究叢書が、これらの研究成果として出版されています。また、成蹊大学と海外の研究者の研究交流の橋渡しとして、こちらも設立以来、招聘外国人研究員制度を設け、渡航費や滞在費の支援を行っています。これら3つの主力事業は、今年度も4月以降、順次、ご案内を差し上げる予定です。皆様方の積極的なご参加、ご応募をお待ちしています。

2026年度の講演会は、「21世紀のアメリカ安全保障政策」、「高校教育無償化の現状」、「地方政府の外国企業誘致戦略」、「2030年代の日中関係」の4テーマを実施する計画です。まず4月には、「21世紀のアメリカ安全保障政策の政治経済学」と題し、この分野で国際的に著名な米ダートマス大学公共政策大学院教授のステファン・G・ブルックス氏にご講演いただきます。2026年はベネズエラ、そしてイランと、なぜトランプ大統領の軍事作戦が、2026年に頻発しているのか、アメリカ現代政治史の視座から解説いただく予定です。12月には日中外交の最前線で活躍された垂秀夫氏(前中国大使)をお招きし、日中関係の長期展望について、ご経験からもたらされる将来の見通しをお話しいただく予定です。現在の日本外交の最重要課題が対中政策であることは論を待ちません。その意味では、2026年度のセンター講演会は、米国と中国というG2の安全保障外交に焦点を当てる講演会を開催いたします。

この他、昨年開設したCAPS公式YouTubeチャンネルからのオンデマンド講演会は、本年も継続します。2025年度は、日比野啓氏(本学文学部教授)の大佛次郎賞受賞記念講演会、五十嵐隆幸氏(防衛省防衛研究所専門研究員)による台湾有事に関する講演会、韓相一氏(CAPS研究員)による韓国政治と日韓関係についての講演会の3つのコンテンツを配信中です。ONLINE CAPS CINEMAは昨年度も、成蹊大学在学生、成蹊学園教職員を対象として、社会問題や新たな国際潮流を取り上げる映画6作品をオンデマンドで配信しています。配信継続予定の2026年度の6作品も、様々なテーマに焦点を当てています。また、2026年度も、当センターは成蹊教養カリキュラムのオムニバス講座「アジア太平洋地域の国際協力と開発援助」を開講します。ここでは、ゾライダ・ムスタファ氏(セインズ・イスラム・マレーシア大学准教授)やアリ・アケミク氏(福岡大学教授)他、国内外の日本学研究者による講義を予定しています。

本年度は他にも様々な企画を計画していますので、今後、随時案内をさせていただきます。今後とも、ご関係者の皆様、学内の皆様には、当センターの運営にご協力とご理解を賜れば大変幸いです。2026年度もよろしくお願い申し上げます。



CAPS 企画の報告

CAPS 主催講演会

「未来に拓く女性政治リーダーへの道」報告

新潟国際情報大学 国際学部 准教授(前CAPS主任研究員) 蔡 珂

成蹊大学アジア太平洋研究センター (CAPS) 主催の本講演会は、ダートマス大学 (米国) 准教授で政治学者のデボラ・ジョーダン・ブルックス氏をお招きし、2026年2月28日に成蹊学園本館大講堂で開催された。

近年、女性政治リーダーの増加は世界で重要なテーマとなっている。女性政治家が増えることは、単に政治分野だけの問題ではなく、教育、家庭、企業など社会全体に関わる課題である。ブルックス氏は、女性、政治、メディアを専門に研究・教育に携わり、女性のエンパワーメント、世論、政治広告を研究している。本講演では、女性政治リーダーの現状と課題、そしてその解決策について、主にアメリカと日本を中心に国際比較の視点からご講演いただいた。

まず、日本における女性議員の割合は依然として低い水準にある。日本の女性議員比率は約15.7%であり、これは主要先進国の枠組みであるG7諸国の平均である約30%を大きく下回っている。一方、アメリカも女性大統領はいまだ誕生しておらず、議会における女性比率も十分とはいえない。

女性が少ない理由として、有権者の性差別、メディアの偏向報道などが一般に指摘される。しかし近年の研究では、女性候補が男性候補より不利であるという明確な証拠は必ずしも示されていない。

では、なぜ女性議員が少ないのか？ブルックス氏はその主な原因として「女性が立候補しないこと」を挙げている。政治家になるための候補者プール、すなわち政治に進む前段階のリーダーシップ人材の供給において男女格差が存在しているのである。特に、経営者、弁護士、行政幹部などの「非政治的なリーダーシップ職」において、男性が多くを占めていることが、政治分野にも影響しているという。また、同等の能力や経歴があっても、女性は男性より自らの選挙当選の可能性に対する自信が低い傾向があり、周囲からの後押しが少ないことも影響している。さらに、攻撃的な選挙戦術や資金集めへの抵抗感、仕事と家庭の二重負担といった要因も、立候補をためらわせる要素となっている。

この問題を解決するためには、いくつかの取り組みが必要である。第一に、女性リーダーを育成するための仕組みづくりが重要である。女性に対して政治参加を積極的に勧めることや、メンタリング制度を通じて、経験豊富なリーダーが若い女性を支援することが有効である。第二に、女性の自信を高める教育や社会的支援も重要である。政治知識や経験を積む機会を提供することで、女性が政治家としてのキャリアを現実的な選択肢として考えやすくなる。



デボラ・ジョーダン・ブルックス氏

第三に、選挙活動の負担を軽減する制度改革も必要である。選挙運動には多くの時間と労力が必要であり、政治活動と家庭を両立できる環境を整備することが、女性の立候補を促進する上で重要となる。

第四に、より広い社会的視点からの改革も不可欠である。男女平等の実現には、育児や家事を男女が公平に担う社会の実現が重要である。学校教育においても女子生徒のキャリア志向を支援し、将来のリーダーとしての意識を育てることが必要である。特に、東京大学など日本のエリート大学における女子学生の入学率を高めることは、女性リーダーの増加につながる。

第五に、企業や大学、政府が連携した取り組みも必要であり、女性管理職の増加や働きやすい環境の整備を進めることが重要である。アメリカでは女性候補者への積極的な勧誘や支援が重視され、日本では飲み会文化など職場文化の改善も女性リーダー育成に寄与するとブルックス氏が指摘している。

ジェンダー平等の実現は容易ではなく、文化的・社会的慣習の変革には時間を要する。また、ジェンダー問題の解決を積極的に取り組む女性リーダーの育成にも時間がかかる。しかし、たとえ完全な達成に至らなくとも、その努力自体が次世代の女性に可能性を示す力となる。女性が政治やリーダーシップの場において「例外」ではなく「当たり前」の存在となる社会を目指すことこそが、本講演の核心的メッセージである。

ご講演の後、限られた時間の中で3名からの質問にご対応いただいた。質疑応答では、「女性リーダーが選ばれやすい背景に、政治制度の違いは影響しているのか」や、「法律でクォータ制を導入することの有効性」、「アメリカで女性大統領が誕生していない理由」などの質問が出され、ブルックス氏は、それぞれに丁寧にご回答くださった。

招聘外国人研究員との交流報告

Travelling in Forms: The Sonnet in Aotearoa / New Zealand

Dougal McNeill

Victoria University of Wellington, New Zealand

The sonnet is a very old, and very famous, poetic form. Its origins are unknown, but examples can be found from thirteenth-century Italian poetry and then, from the sixteenth-century Renaissance onwards, in great bursts of creativity and development across English-language literatures. What happens when the sonnet travels? What might happen when we read a nation's literature not through the prism of history but, rather, through the prompting of form? What might a form teach us? How, in other words, can we learn in form? And how might a form be changed and developed in particular national contexts?

These were some of the questions I spent my time asking as a Research Fellow in the Centre for Asia Pacific Studies, Seikei University, through November last year. CAPS was, once again, a productive, collegial, generous and generative place from which to think about literary form and literary history across the Asia-Pacific region, and I am grateful to all of the staff, especially the Director, and my host, Professor Fuhito Endo, for the opportunity to reconnect with the scholarly life at Seikei. In the years since my last Fellowship (2018), I have had a number of departmental and university-wide administrative and leadership responsibilities at my home University, and have felt my time taken away from the core questions of research and literary scholarship. This latest fellowship, then, was a chance to become familiar once again with the primary excitements and drives of the scholarly life: questions, readings, texts and problems without beginning or end. An interdisciplinary setting like CAPS is particularly helpful for thinking with and about literature. Why do these texts matter, and to whom? In what ways? Putting literature alongside politics, society, history and culture is a way of teaching us to listen differently.

Why do poets chose certain forms? Or, better yet, perhaps, why do certain forms press themselves



Dougal McNeill 氏

on poets? What are we to make now, close to two hundred years on from European contact with and settlement in the islands of Aotearoa, of European forms being used and developed in Asia-Pacific settings? How are old things made new? I am in the early stages of developing a book-length study of the sonnet in Aotearoa, reading some of its finest practitioners closely and with a view to their poems' insights into how they might in turn form our sense of this world. CAPS – and Seikei's superb library – provided an ideal venue for starting out with the big, open-ended, in-development questions that will shape this project. Warmly energetic audiences for some public talks, ably organised by Professor Endo, helped give me the confidence that these questions are worth asking (and a sense that my current provisional answers need development).

Seikei's hospitality and intellectual generosity, and the wider pleasures of walking in Musashino and rediscovering the delights of Tokyo, from the Kanda River to Mt Takao, gifted me the privilege of distance. Looking at New Zealand literature from afar allows a different angle; talking about it with learned and giving Japanese colleagues gives my sense of it a new vitality. For both experiences I am in CAPS's debt, and keen to repay this debt through ongoing relationship, reading and collaboration.

拡大研究会報告

「ユートピアへの憧憬：クリス・ツェーの詩について」

文学部 教授 遠藤 不比人

2025年12月4日(木)午後6時から7時にかけて、成蹊大学2号館306教室において、当研究センター客員研究員であるドゥーガル・マクニール氏による講演会が行われた。氏は、ヴィクトリア大学ウェリントン校芸術メディア学部教授であり、マルクス主義的な論点からイギリス・モダニズム文学を分析した著作を数多く世に問いながら、それと同時に、ニュージーランドを含むオセアニアを舞台にした文学に関する研究に関しても傑出した仕事をしている。前者に関しては、*Writing the 1926 General Strike: Literature, Culture and Politics* (Cambridge University Press, 2015)、*British Literature in Transition 1920-1940: Futility and Anarchy* (Cambridge University Press, 2018)、後者については*Forms of Freedom: Marxist Essays in New Zealand and Australian Literature* (Otago University Press, 2024) および、*Te Whāriki: Reading Ten New Poets from Aotearoa* (Auckland University Press, 2025) が代表的な論考である。本講演は、後述のように、後者の仕事に含まれる。

当日の講演は「ユートピアへの憧憬：クリス・ツェーの詩について」と題され、以下の問いをめぐる真率なる議論が文学の政治的可能性の探究として展開された。すなわち、詩は再び「新たな」文化的形態としての役割を果たすだろうか？トランプ時代と気候危機の時代にあって、ユートピアへの渴望はどうなるのか？本講演では、ニュージーランド桂冠詩人(2022-2025年)であり、奔放さ・過剰な美学・「過ぎたるもの」・豪華な美を掲げるアオテアロア＝ニュージーランド詩人ネットワークの要であるクリス・ツェーの詩を通してこの可能性が考察された。ツェーの詩学は、世界の終わりを感じさせるこの時代にあって、ユートピア的な欲望をめぐり、あるいはそれと共に、未来への可能性を考察する道筋を提供すると、マクニール教授は論じた。遊び心にあふれながらも、切迫感に満ち、祝祭的でありながらも批判的なツェーの多層的な声は、現代に「希望の資源」をもたらすに違いない、その文学的可能性が本



Dougal McNeill 氏

講演の結論である。

この講演に触発されて活発な議論がなされた。マクニール教授も準拠する米国のマルクス主義理論家であるフレドリック・ジェイムソンが再評価するエルンスト・ブロッホの否定神学的なユートピア理論との関連性はどのようにこの講演の脈絡で理解できるのだろうか、あるいは英国のマルクス主義批評家であるレイモンド・ウィリアムズの主要概念である「支配的なもの」「残滓的なもの」「(再)勃興的なもの」からなる歴史的弁証法との関連についてなどが問われ、それに対してマクニール教授から洞察に溢れる応答があった。これからも明らかなように、政治的かつ経済的な意味において「絶望」が支配的な情動と化した現在において、詩的言語によって喚起されるマルクス主義的なユートピアの可能性が萌芽的な残滓として消滅することなく潜在することを、ツェーのテキストの精緻な読解によって示唆するこの講演の理論的射程は、私たちが今経験するディストピア的な時代にあって極めて貴重なものである。この議論は、ごく最近翻訳が出版されて話題となっているローレン・バーラントの『残酷な楽観性』と通底する歴史意識を提示している。

シリーズ 本を読む

ビオリカ・マリアン著、今井むつみ監訳、桜田直美訳『言葉の力「思考・価値観・感情」
なぜ新しい言語を持つと世界が変わるのか?』(KADOKAWA、2023年)

経営学部 教授 藤田 玲子

多言語翻訳や会話支援を可能にするAIベースの言語処理ツールは、その精度と高度化が日進月歩で向上している。このような時代を迎え、英語をはじめとするさまざまな外国語を学ぶ必要はもはやないと考える人も少なくないかもしれない。しかし、本当にそうだろうか。むしろこのような時代だからこそ、外国語を学ぶことの意義を改めて見つめ直す必要があるだろう。

本書の著者であるビオリカ・マリアン氏は、バイリンガリズムと脳・認知の関係を研究する世界的に著名な心理言語学者・認知科学者である。本書は、2023年に出版された *The Power of Language: How the Codes We Use to Think, Speak, and Live Transform Our Minds* (Dutton社) の日本語訳版であり、同分野で活躍する研究者である今井むつみ氏が監訳を務めている。本書には彼女による洞察に富んだ解説も加えられている。本書を読めば、外国語を学ぶことの意義が想像以上に大きいことを理解できるだろう。これまでこの分野で蓄積されてきた多くの研究成果を紹介しながら、個人にとってのバイリンガル／マルチリンガルである利点、そして社会における言語の役割が、非常にわかりやすく、説得力のある形で説明されている。

脳が二つまたはそれ以上の言語を操るということは、脳内ネットワークが変化することを意味する。言語に伴う価値観や思考様式に触れることで、知覚や現実の解釈も変化するという。興味深い研究例として、英語と中国語のバイリンガルに「手を挙げて遠くを見ている銅像は？」と質問したところ、英語で尋ねれば「自由の女神」、中国語で尋ねれば「毛沢東」と答える割合が高かったという報告がある。これは、言語ネットワークは記憶や知覚、経験に影響を与えるということを示している。また、さまざまな研究から、複数の言語を話す能力は創造的なタスクにおいてより高いパフォーマンスをもたらすことも明らかになっている。他言語を知ることによって脳内構造は変化し、脳内では驚くべき並行処理が行われる。複数言語が生み出すニューロンのつながりによって、モノリンガルには思いつかない発想が可能になるという。すなわち、多言語を操る人には、そうでない人には見えないつながりが見えるということである。そして、それは学習効果にも良い影響を及ぼ

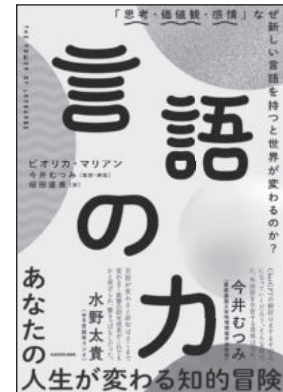
すという。

一方で、本書の後半では、言語が社会の構造や機能に大きな影響を与え、力をもつことが、さまざまな事例を通して説明されている。政治や広告などで用いられる言語が人々の思考や行動を変化させることは、私たちにとっても身近な現象であろう。著者は、言語は「究

極のインフルエンサー」であるとも述べている。また、言語に埋め込まれた文化的価値観に対して私たちが敏感になる必要があることも指摘している。これは、職場の人間関係や社会システムの構築においても欠かせない力である。母語が異なればものの見方も異なるという現実を理解することで、相手を理解しようとする姿勢にもつながるからである。

教育現場にいる私たちにとって、学生が他言語を学ぶことで異なる視点や考え方を理解し、より広い視野で世界を見る力を身につけることを推奨し支援することは、特に現代社会において極めて重要と言えるだろう。AIがどれほど高度なコミュニケーションツールになろうとも、あくまでツールはツールにすぎない。文部科学省でも「AI時代に外国語を学ぶ本質的意義」が議論されている。同省の資料は、AIの発展によって子どもたちが外国語を学ぶ意義を感じにくくなり、学習動機がさらに弱まる可能性を指摘している。同資料では、他者との共存や共創を前提としたよりよい社会の構築、そしてコミュニケーションを通じた他者とのつながりや思考の広がりがもたらす個人のウェルビーイングこそが、外国語を学ぶ本質的意義であると示されている。これらはまさしく正論であり、目指すべき方向性であるが、学習者にとって直接的な動機にはなりにくい側面もある。

しかし、本書が示すように、外国語習得に挑戦することが脳の構造に変化をもたらす、記憶力やパフォーマンス、さらには創造力までも大きく向上させる可能性があることが知られれば、私たちの学習意欲は格段に高まるのではないだろうか。



CAPS 活動報告 (2025.12.15 ~ 2026.3.15)

1. 公開講演会、研究会等

～CAPS主催講演会～

「未来に拓く女性政治リーダーへの道」

開催日	2026年2月28日(土)
講演者 (敬称略)	Deborah Jordan Brooks (ダートマス大学准教授)
モデレーター	内藤 朋枝(経済学部准教授)
参加者数	87名
言語	英語(逐語通訳あり)

～プロジェクト研究会～

開催日	2025年12月15日(月)
プロジェクト名	中国の挑戦とインド太平洋 —「自由で開かれた国際秩序(FOIO)」の展望
講演者 (敬称略)	ブレンドン・キャノン(ハリファ大学准教授) アッシュ・ロシター (ラブダンアカデミー准教授)
参加者数	3名

開催日	2026年1月22日(木)
プロジェクト名	中国の挑戦とインド太平洋 —「自由で開かれた国際秩序(FOIO)」の展望
内 容	研究成果の出版内容についての意思疎通
参加者数	6名

開催日	2026年2月7日(土)
プロジェクト名	中国の挑戦とインド太平洋 —「自由で開かれた国際秩序(FOIO)」の展望
講演者 (敬称略)	山本 哲史(航空自衛隊幹部学校 航空研究センター研究員) 渡邊 優(成蹊大学客員教授)
参加者数	11名

2. 研究出張

～海外出張～

期 間	2026年2月16日(月)～2月27日(金)
出張者	蔡 珂(CAPS主任研究員)
行 先	中国
目 的	資料収集等

～国内出張～

期 間	2026年1月9日(金)
出張者	蔡 珂(CAPS主任研究員)
行 先	千葉大学
目 的	研究プロジェクト研究会参加

期 間	2025年12月12日(金)～12月16日(火)
出張者	韓 相一(CAPSポスト・ドクター)
行 先	福岡
目 的	九州史学会大会参加、資料調査等

CAPS Newsletter No.170

2026年4月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1

☎ 0422-37-3549

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>

CAPS の公式ウェブサイトは
コチラ→

